東近江総合医療センタートピックス

当センターでは最近こんな事がありました

令和6年能登半島地震に医療救護班を派遣しました。

令和6年1月1日に発生した、能登半島地震で被災した地域の診療支援を行うため、当院から医療救護班を派遣しました。令和6年1月3日に石川県知事から国立病院機構に医療救護班の派遣要請があり、近隣都府県の国立病院機構病院からの派遣が始まりました。当院には、1月10日～14日までの5日間の派遣要請があり、医師1名、看護師2名、薬剤師1名、事務2名の計6名を派遣しました。現在、国立病院機構は主に輪島地区の避難所等の診療にあたっています。現地ではライフラインも十分でない中、診療支援を行うため志の高い職員を派遣しています。また、派遣車両には、昨年、皆様からの温かいご支援（クラウドファンディング）により購入しました救急車を活用しております。皆様のご支援が被災地域の診療支援の一助となっています。

「令和6年能登半島地震」における国立病院機構の支援活動については、国立病院機構のホームページでご覧ください。
https://nho.hosp.go.jp/index.html

INFORMATION

当センターからのお知らせや情報をお届けします。

公式インスタグラムをはじめました！

HIGASHIOMI_IRYO

フォローはこちら！

【公式】東近江総合医療センター

病院の魅力を感じていただきたいとの想いから、当院の取組みや日常をご紹介する公式インスタグラムを開設しました。
病院職員がさまざまな情報を発信してきます。

HIGASHIOMI_SANFUJINKA

フォローはこちら！

東近江総合医療センター産婦人科【公式】

妊娠・出産・分娩・育児に関する情報や、病棟からのお知らせを発信していきます。
お母さんや赤ちゃんの様子、スタッフの紹介など院内の様子や雰囲気を感じていただけます。

周辺地図

アクセス

公共交通機関ご利用の場合

電車▶バス

ＪＲ東海道本線「近江八幡駅」下車、近江鉄道に乗り換え「八日市駅」下車。
【近江鉄道バスご利用の場合】
「東近江総合医療センター」または「五智前」下車。
【コミュニティーバス(ちょこっとバス)ご利用の場合】
市原・沖野玉緒・南部御園線「東近江総合医療センター」下車。

高速バス

名神高速バス「名神八日市」下車、東方へ徒歩約5分。

車をご利用の場合

名神高速道路「八日市IC」から約2分。
「八日市IC」を出て1つ目の信号を右折し約300m先右側。

独立行政法人 国立病院機構
東近江総合医療センター
滋賀医科大学地域医療教育研究拠点病院

広報誌 つながり vol.051 2024年1月号
独立行政法人国立病院機構 東近江総合医療センター 広報委員会
〒527-8505 滋賀県東近江市五智町255　TEL：0748-22-3030（代表）　FAX：0748-23-3383

東近江総合医療センター 広報誌 Vol.051

つながり

対談　地域医療の中心を担う

東近江総合医療センターの役割とは

院長
野﨑 和彦
Nozaki Kazuhiko

×

東近江医師会 会長
小杉 厚
Kosugi Atsushi

病院からの最新情報をお届けします！

独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センター

対談　地域医療の中心を担う

東近江総合医療センターの役割とは

地域住民のみなさんの健康を支えるため、さまざまな医療機関が連携する地域医療が推進されている現在、患者さんの「かかりつけ医」をサポートする中核病院の役割が重要となっています。そうしたなか、「地域医療支援病院」である当院が果たすべき役割とは何か？今回の特集は、東近江医師会の小杉会長をお招きし、野崎院長とのクロストークをお届けします。

東近江医師会 会長 小杉 厚 Kosugi Atsushi

×

院長 野崎 和彦 Nozaki Kazuhiko

幅広い領域をカバーする地域の中核病院として機能

野崎院長（以下敬称略）：今回は、東近江医師会の小杉会長と、「東近江市の医療を支える地域の中核病院として、東近江総合医療センターが果たすべき役割」についてお話をさせていただき、いろいろなご意見をいただければと思います。当院は2013年に現在の体制となって新たなスタートを切ったわけですが、当時は多くの地方都市の病院と同じように、医師不足という問題を抱えていました。この問題を改善するために、当院を滋賀医科大学の地域医療教育研究拠点として医師の育成に取り組み、少しずつではあるものの着実に成果を挙げてきました。

小杉会長（以下敬称略）：私は東近江市に開業して19年目になるので、当時の状況はよく知っています。今、院長がおっしゃった取り組みによって、専門性の高い医師が東近江総合医療センターに多く来られて、現在はほぼすべての診療科をカバーする地域の中核病院として機能していると感じています。私たち開業医にとっては、患者さんが救急を要する状態になった場合、頼れるのは高度医療を行える中核病院ですので、とても心強いです。

野崎：病院の名称に「総合」という文言が入っていることからも、広い領域で質の高い医療を展開することを目指していますが、限られたリソースの中ですべての診療科を網羅して常時対応することは困難となりつつあります。救急に関しては、「できる限り断らない救急」の体制構築が必要であり、今後も高齢化社会の進行に伴い高齢者の救急搬送が増えることが予想され、当院の重要な使命の1つです。小児については、県内の小児救急の集約化が図られており、今後は平日・昼間の救急は当院で対応し、休日・夜間の救急は近江八幡市立総合医療センターに対応していただくことになっています。ひとつの病院ですべてを完結させるのではなく、地域全体で効率的、効果的に医療を展開する必要があります。

小杉：その方向性は、国も推進しているように間違いありません。それをいかに医療の現場で実現させるかを中核病院と地域の医療機関などで検討し、実行することが求められているのだと思います。

かかりつけ医との迅速で綿密な連携が重要

野崎：当院は2019年に、患者さんの「かかりつけ医」を担う地域の開業医と協力し、より良い医療を提供する「地域医療支援病院」に認定されました。そして現在は、東近江医師会をはじめすべてのステークホルダーと定期的に会合を開き、さまざまなテーマについて検討しています。主な議題となっているいのは、「救急の受け入れ」、「開業医から病院への紹介と、病院から開業医への逆紹介」、住民の方々を対象にした公開講座をはじめとする「健康に関する地域貢献」です。

小杉：「紹介・逆紹介」については、開業医と病院との信頼関係が土台となります。東近江総合医療センターとはこの10年間で信頼を築くことができ、私たちも安心して患者さんに紹介することができています。とはいえ、完璧というわけではないので、意見を出し合って改善していきたいと考えています。

野崎：やはり、双方の医師が顔を合わせて意見を交わすことが大切ですね。人柄や診療に対する考えなどを知ることで、確実に連携は深まります。今、開業医の方々と当院の連携で、課題のひとつと感じているのが“スピード感”です。地域と病院をつなぐ部署として地域医療連携室があり、なくてはならない存在となっていますが、命に関わるような重症の患者さんに対しては、各領域の専門医とダイレクトに連絡がとれるホットラインが有効だと考えています。たとえば、脳卒中は1分1秒の違いが命に関わります。今後は緊急を要する疾患についてはホットラインも検討したいと考えています。

小杉：それはありがたいです。開業医からのリクエストとして、病院を紹介するために地域医療連携室に連絡した際、患者さんを診てもらうまでの待機時間を教えていただければと思っています。どれくらい待てば良いのか、大体の目安を伝えるだけでも、患者さんやご家族の安心感につながりますので。

野崎：確かにそうですね。患者さんとかかりつけ医の先生とは信頼関係で成り立っているので、紹介される際に患者さんに明確な説明がないと、その土台が揺らいでしまいますね。

小杉：私もかつては病院に勤務していたので、病院の医師が忙しいのは承知していますが、さらに綿密な情報共有ができる仕組みがあればと感じています。

野崎：医師が忙しくて対応が難しいということであれば、それは病院の体制にも改善の余地があるということです。そのあたりも詳しく検証して、改善できるように努めてまいります。

学術的な連携が多くの人の健康に役立つ

小杉：地域の医療機関と中核病院のより良い連携を図るためには、病院の先生方に私たち開業医がどんな考えをもって、どのような診療をしているのかを知ってもらうことも大切だと思っています。たとえば、交流会などで症例紹介や診療レポートを発表するのもいいでしょう。

野崎：地域の医療機関で役割分担をするうえでも相互理解は不可欠です。それがないと溝ができ、タテ割りの医療体制になってしまいます。そうならないためにも、お互いに活動発表し合うことは意義があると思います。

小杉：日々の診療に関する連携に加えて、学術的な連携も大切だと考えています。私は産業医としても活動しているのですが、以前、担当している企業の社員さんが次々に肺炎にかかるケースがありました。原因が不明だったので、東近江総合医療センターの先生に協力していただき調べたところ、原因を突き止めることができたんです。そして、その先生は論文にまとめて学会で発表されました。論文を発表することで世界に情報発信し、多くの人の健康に役立つ可能性が広がります。地域で起きている状況を、高度医療を展開する中核病院に伝え、研究などに発展するケースがもっと増えればいいですね。

野崎：論文は国を問わず多くの医師が読むので、当院でもできる限り英語で論文を書くように勧めています。会長もよくご存知かと思いますが、論文には書き方・読み方があるので、そういった知識やノウハウを、これからの医療を担う医師に伝えることも私たちの役割だと考えています。

小杉：今は医師の働き方改革が推進されているため、論文を書く時間をどのように確保するのかも課題のひとつです。ただ、忙しいなかでも論文を発表したいという熱意をもった医師は必ずいるはずです。まずは、多くの医師に関心をもってもらえるように、働きかけることが大切なのではないでしょうか。

野崎：医師はさまざまな事象に関心をもち、主体的に動く姿勢が重要です。当院の医師にも“待ち”の姿勢ではなく、自らアクションを起こしてほしいと思っています。それは論文の発表でも、住民の方々に向けた公開講座の開催でもよいです。そういった活動は必ず医師の自己啓発となり、地域の方々への貢献につながりますから。

小杉：そうですね。もうひとつ、お話ししたかったのはコロナ禍での経験です。あの時、医療従事者は、安全・安心の対応を目指して試行錯誤を繰り返しました。そのなかで地域の医療機関と中核病院との連携に関しても、有効だったことや改善点が見えてきました。この先、感染症が広がる可能性は充分にあるので、当時の取り組みを総括して、今後に活かせればと考えています。また、東近江総合医療センターとの勉強会で行った、医療用マスク「N95」の正しい付け方や、抗生物質の使用方法についてのレクチャーはとても役立ったので、こうした活動も力を入れていきたいですね。

野崎：当院は今後も医師会をはじめ、さまざまな方々のご意見を参考にしながら、地域の中核病院として信頼される病院を目指していきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いします。

Profile

院長
野崎 和彦

京都大学医学部 卒
脳神経外科
2022年4月 副院長
2023年4月より現職

東近江医師会 会長
小杉 厚

滋賀医科大学 卒
こすぎクリニック院長
2022年4月より現職

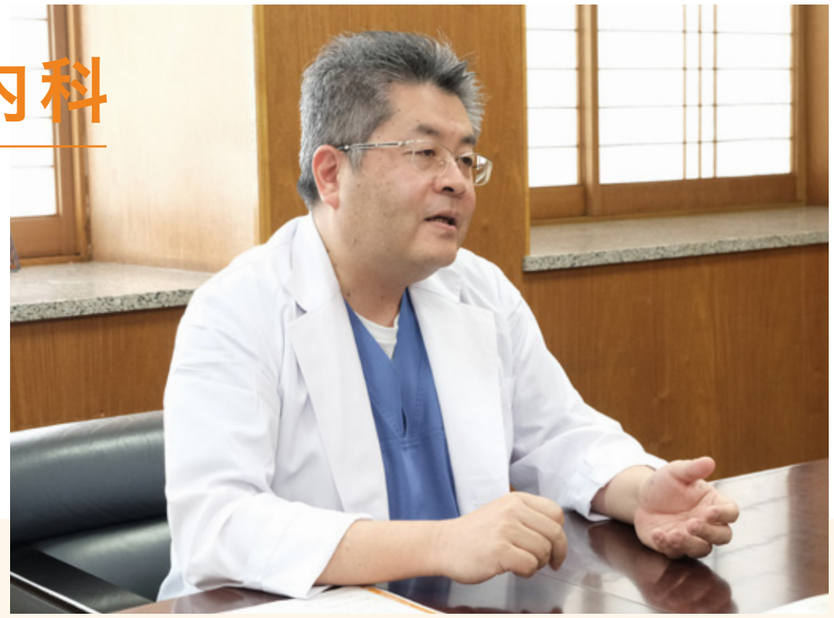
教えて！
東近江総合
医療センター

東近江総合医療センターの

診療科をご紹介

東近江総合医療センターの診療科をご紹介していきます。

消化器内科



消化器内科医長
伊藤 明彦

患者さんの負担が少ない内視鏡検査・治療に注力

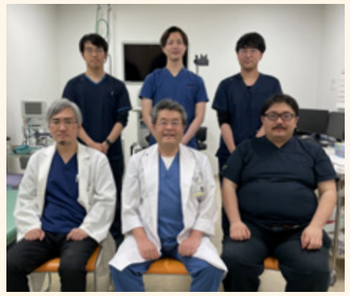
当院の消化器内科は、東近江医療圏の中核病院として、食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・直腸から、肝臓・胆のう・膵臓まで、幅広い疾患の診療をチーム一丸となって行っています。そうしたなかで大きな柱となっているのが、がん診療です。消化器系のがんといえば手術をイメージされる方も多いと思いますが、早期であれば内視鏡による切除が可能なため、当科では内視鏡治療に力を入れています。さらに、内視鏡スコープを喉から食道に通す際の嘔吐感をおさえる「鎮静下内視鏡」にも対応しています。こうした検査・治療によって、患者さんの負担軽減や早期回復を図っています。

がんの早期発見・治療を目指し、さまざまな取り組みを実施

がん治療において重要なポイントとなるのは、早期発見・早期治療です。残念ながら東近江は、がん検診の受診率があまり高くなく、がんが進行してから来院されるケースが少なくありません。こうした状況を改善するために、2018年から「東近江市胃内視鏡検診」に取り組んでいます。従来のバリウムによる検査と比べて嘔吐感も少ない経鼻内視鏡による検査も可能です。また、胃がんの原因となるヘリコバクター・ピロリ菌感染が見つかった場合は、除菌を行い予防につなげます。

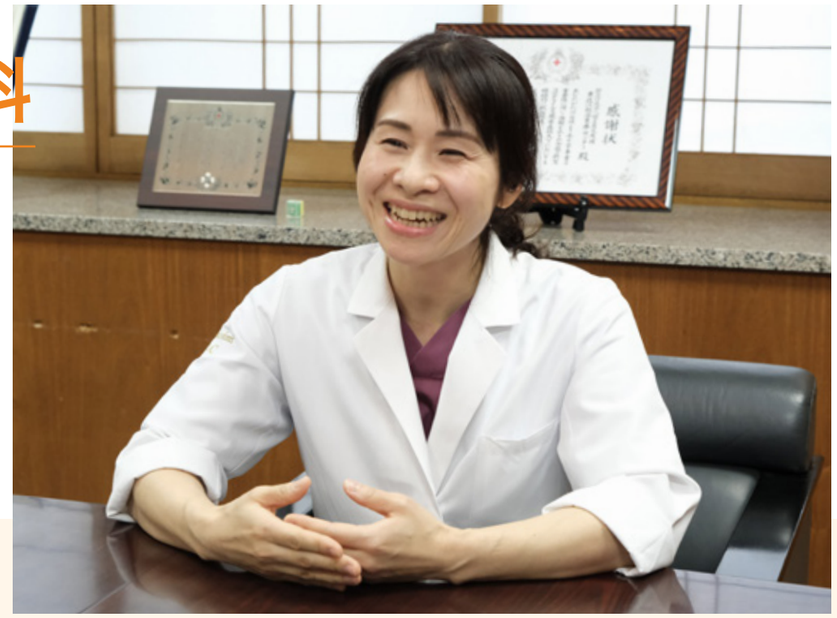
その他にも、膵臓がんの早期発見・早期治療のために、地域の開業医の先生方と協力し、「膵臓がん早期発見プロジェクト」を開始しました。内容は、最初に地域の医療機関などで問診を行っていただき、リスクがある方には当院の専門的な資格をもつ検査技師が腹部エコーを撮り、さらに検査が必要な場合は超音波内視鏡で精密検査を行うというものです。こうした診療が行える最新の設備とスキルを備えていることが、当科の強みといえるでしょう。

難病に指定されている潰瘍性大腸炎・クローン病の治療に対応



潰瘍性大腸炎とクローン病などの総称である炎症性腸疾患は、国の指定難病となっており、患者数は増加傾向にあります。今のところ完全に治す治療法はありませんが、近年、効果のある新薬が開発されています。こうした薬や、カプセル内視鏡を含めた小腸内視鏡を積極的に取り入れた検査・治療を行っていることも当科の特色です。私たち消化器内科は、今後も新しい治療法を効果的に取り入れ、地域の患者さんが安心・安全に診療を受けていただけるように努めてまいります。

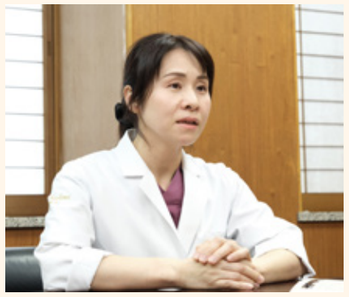
産婦人科



産婦人科医長
中多 真理

女性特有の疾患全般に対応 新しい治療法も積極的に導入

産婦人科では、お産や女性特有の疾患全般の診療を展開しています。良性疾患に関しては、月経困難症、子宮筋腫、卵巣腫瘍などに幅広く対応しており、悪性疾患に対しては主に放射線治療や化学療法を行っています。



手術を要する場合、患者さんの負担が少ない腹腔鏡手術を積極的に行っており、専門的なスキルを備えた「産婦人科腹腔鏡技術認定医」が在籍していることが強みです。また、2022年からVNOTEs（ヴイノーツ）というお腹を傷つけずに膣からアプローチする腹腔鏡手術を開始しました。

その他にも、一般不妊治療（体外受精以上の治療を要する方は、不妊専門の医療機関を紹介）や、子宮頸がん予防ワクチンの接種なども実施しています。

バースプランをうかがい“その人らしい”お産を

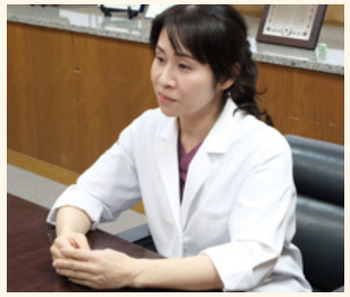
産科では、妊婦健診からお産まで継続性のあるケアを行っています。そして、一人ひとりのバースプランをうかがい、できる限り理想のお産ができるように努めています。ここ数年はコロナ禍の影響のため、ご主人の立ち会いやご家族の面会はできませんでしたが、現在は解除されています。ご要望があれば、ご主人にへその緒を切ってもらったり、記念撮影を行ったりすることも可能です。

そして、妊産婦の方とのコミュニケーションを大切にしており、そのひとつとして助産師が妊婦健診からきめ細やかな保健指導を行っていることが挙げられます。そこで疑問や不安に感じていることについて、気軽に相談していただけます。

また、ハイリスク妊娠と判断される方に対しては、当科と小児科、助産師による合同カンファレンスを定期的に開いて情報共有を行い、最適なお産に向けて検討する体制を整えています。

患者さん、妊産婦さんに寄り添う安全・安心・満足度の高い診療

今後の目標は、妊娠・分娩管理および婦人科手術に今まで以上に力を入れることです。コロナ禍で落ち込んだ分娩や手術件数も増やしていきたいと考えています。また、外来診療にあたっては、1人1人の患者さんのニーズに応じた診療を行うよう努めています。産科に関しては、地域の方々との距離の近い関係づくりに取り組んでいるところです。診療科独自のSNSアカウントを開設（裏面を参照）し、情報発信をしているのもそのひとつです。当科は、これからも患者さんや妊産婦さんに寄り添った、安全・安心・満足度の高い診療を目指していきたいと考えています。



教えて！
東近江総合
医療センター

各部門のお仕事がより分かる！

東近江総合医療センターの部門紹介

今回ご紹介する部門は

リハビリテーション科

リハビリテーション科ってどんなところですか？

リハビリテーション科は どのような仕事をしている所？

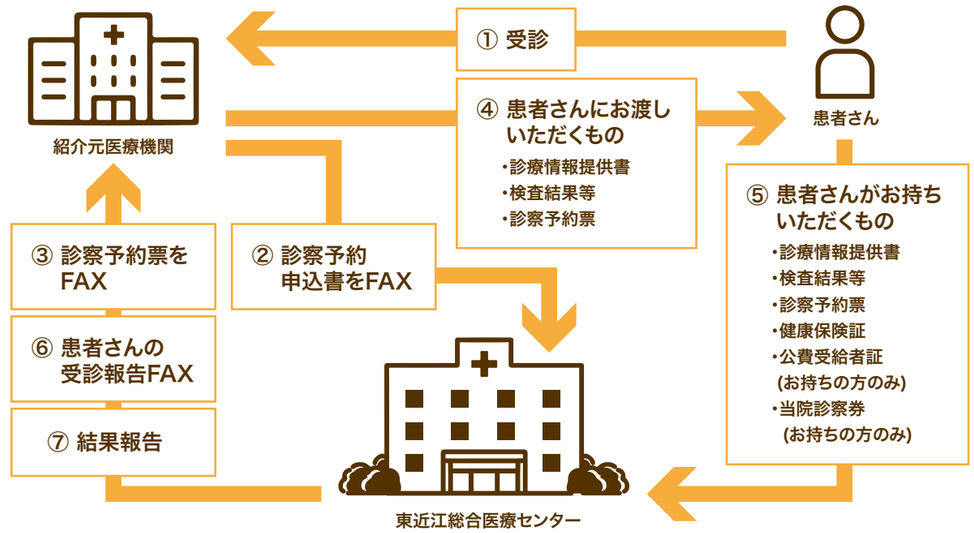
リハビリテーション科は、金医長（脳神経内科部長）を筆頭に理学療法士９名、作業療法士５名、言語聴覚士２名、助手１名で構成されています。当科では医師の指示のもと、患者さんの状態に合わせた治療を行い、様々な疾患や外傷等により生じた機能障害を改善・維持して、患者さんの社会復帰や地域への貢献を援助します。当科の特徴として手術後の患者さんの早期介入やがん患者さんの手術・化学療法後の体力維持・増大のための運動療法介入等があります。理学療法部門では運動療法や介助等行いながら立つ、歩くといった基本的な動作の獲得を目指した治療を行います。作業療法部門では身体機能だけでなく精神機能面も含めて支援し、より具体的な生活を想定した機能・能力改善、環境調整、自助具の提供などを行います。言語聴覚部門では発声・発話等の問題に対して、必要な治療や指導等でコミュニケーションが円滑に行えるよう支援しています。また、食べ物を飲み込みにくい、むせるといった嚥下機能の低下に対して嚥下の練習をし、歯科口腔外科や栄養管理室と協力して食形態の調整や助言を行います。

質の高い治療を提供するために

当科スタッフは認定療法士・3学会合同呼吸療法認定士・がんのリハビリテーション研修会修了者などの資格取得者が多く在籍しており、研修・学会にも積極的に参加しています。日々進歩する医学知識や治療技術を習得するためにスタッフ一同、今後も研鑽を積んでいきます。また医師だけでなく看護師や管理栄養士、地域医療連携室など他部門・他職種との連携をより強化させ患者さんの支援を行ってまいります。

あらかじめ予約することで、待ち時間の短縮にも！

ご紹介の手続きと予約診療の流れ



① 患者さんに地域医療機関を受診していただきます。
② 地域医療機関から、必要事項を記入した診察予約申込書をFAXにて送付いただきます。
③ 受診いただく日時・担当医を記載した診察予約表票を依頼元へFAXさせていただきます。
④ 依頼元の先生方より、患者さんへ診察予定票・紹介状をお渡しいただきます。
受診当日、患者さんは以下の物をお持ちの上、当院受付内の初診窓口へお越し下さい。
・診療情報提供書(紹介状・検査結果等)
・健康保険証
・診療予約票(地域医療機関の医師より受け取ってください。)
⑤ 簡単な手続きの後、診療科へご案内いたします。
⑥ 依頼元の地域医療機関へは、患者さんが受診なされた旨をFAXにてご報告いたします。
⑦ 診察医より、診療結果報告を地域医療連携室を通してご報告させていただきます。

お問合せ
地域医療連携室
TEL
0748-22-3030
FAX
0748-22-5626

第19回東近江医療圏がん診療公開講座を開催しました。

令和5年11月3日（金・祝）に「かけがえのない人生を豊かにするために「人生会議」してみませんか？」をテーマに第19回東近江医療圏がん診療公開講座を当院きらめきホールで開催しました。特別講演には、東京大学大学院人文社会学系研究科死生学・応用倫理センター 会田特任教授をお招きし「一人一人を人として尊重するための意思決定支援」と題してご講演いただきました。当日は医療関係者・一般の方含め約90名が参加され、講座内容へのご意見として多くのご好評をいただきました。今後も、医療関係者、地域の皆さんに関心を持ってもらえるように開催していきます。